

アイヌ口承文芸（散文説話）にみる神の衣装表現について

—アイヌ語アーカイブ資料の分析—

安田千夏

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 アイヌ語アーカイブについて
 - 3 対象資料の伝承者について
 - 4 問題の所在
 - 5 対象資料一覧
 - 6 「神の衣装」表現の分類
 - 7 考察
 - 8 おわりに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、口承文芸 (Oral literature)、散文説話 (Prose tales)、言い回し (Phraseology)

1 はじめに

アイヌ口承文芸の世界観では、この世と神の国には生物や自然現象などの数多の神がいて、自由意思で行き来をしているとされている。特に散文説話では、そうした神々が良きにつけ悪きにつけ人と関わりをもつ様子を、人間目線で描いたものが数多く採録されている。その世界観では、神の国での神は人と同じ姿で暮らしていて、何かの都合で人間界を訪れる時に、生物神であれば生物の姿へと「衣装の着脱⁽¹⁾」によって変身すると説明されたものがある。そして物語の展開によっては、人と交信するために、夢もしくは実体で本来の姿、つまり人間と同じ姿になり人前に現れることがあるのだが、その時身につけている衣装は、とある特徴を有しているとされる。それは端的にいうと、人間界での「仮の姿」を彷彿とさせる色なり文様なりが施されているのが常であり、このことは伝承者への聞き取り調査の結果によっても裏づけられる。以下はアイヌ民族博物館⁽²⁾所蔵音声資料で、沙流地方伝承者の川上まつ子氏が「口承文芸で神がどのような姿で登場するのか」について説明した部分の抜粋である。

(前略) kawkaw noka o amip mi (あられ模様が
入った着物を着る) って言う。payokakamuy (伝染

病の神) は何amip (着物) ったっけな? kunne
cironnup kamuy (黒ギツネの神) はkunge kosonte
utomciwre (黒い上等の着物を身につける) って言う。
だからやっぱり着物着てるよ、みんな。着物のことだ
よ。pesiksik noka oma (しずく模様が入った) って
いうのは、wakkauskamuyの着物はpesiksik noka
omaって言うの、水の流れがこう何か、いろいろなる
べさ。そんな模様の入った着物着てること。(中略)
kunge cironnup (黒ギツネ) はkunge kosonte
utomciwre (黒い上等な着物を身につける)。kunge
ko...cironnup kunne kosonte utomciwre. kakkok
(カッコウ) だって、kakkok noka ewato (カッコウ
模様の居並んだ)。kakkok noka ewato kosonte
utomciwre (カッコウ模様が居並んだ上等の着物を身
につける) って言うんだから、鳥でさえも着物着てい
るっていうもの、kamuyなおさらみんな着物着て
ると思うよ。⁽³⁾

この語りにみられるのは「水の神＝しずく模様の着物」「黒ギツネの神＝黒い上等の着物」「カッコウの神＝カッコウ模様」というように、それぞれの神の象徴となる色や模様のついた衣装を身につけて人前に登場する神々の姿である。そしてそれは何の神であるかを人に知らしめるための語り上での仕掛けということもでき、豪

安田千夏：日本口承文芸学会会員

(1) 北原 (2018)。

(2) 2018年3月をもって閉館し、2020年同地に国立アイヌ民族博物館が開館した。資料はそちらに引き継がれるべく協議中である。

(3) アイヌ語アーカイブ所収。資料番号34610B。

華絢爛たる神の衣装が語られる散文説話の世界を筆者はアイヌ文化を学びはじめた当初想像していた。しかし実際に散文説話を聞き起こす作業を進めていくと、こうした文様が多様な描写の例は通例というほどに多いわけではなく、主流なのはそれとはまた別の表現なのではないかという疑問を持つようになった。

2 アイヌ語アーカイブについて

アイヌ民族博物館では、1976年の設立当初から、日高地方をはじめとした道内各地の伝承者を対象としたアイヌ語の聞き取り調査⁽⁴⁾を実施してきた。調査内容は口承文芸のみならず、生活誌から歌謡、儀礼など多岐にわたり、貴重な資料が数多く採録されているが、音声資料670時間（うち口承文芸103時間）、映像資料500時間という膨大な資料のほとんどは調査が実施されたのみに留まり、近年まで未整理のまま博物館に保管されている状態にあった。

2015年、同館で文化庁国語課の補助金を受けて始まったアイヌ語アーカイブ事業により、ようやく音声資料の公開への道筋がついた。2020年現在で、口承文芸82時間分、その他映像資料などが順次公開されるに至っている。しかしこれはまだ日本語語りを含めた資料全体で見ると、1割程度の量にしか満たない。これについては今後、さらなる作業効率化のための新システム構築が計画されている。

筆者はそうした口承文芸資料のうち大部分の聞き起こしと翻訳を担当してきた経緯から、本稿ではこれらの資料のうち、公開済みの資料についての分析を試みることにした。

3 対象資料の伝承者について

本稿で取り上げる資料は、日高地方の3名の伝承者により語り残された資料である。以下略歴について、アイヌ語アーカイブ「アイヌ語資料と語り手」より引用する⁽⁵⁾。

織田ステノ氏（1901(?)–1993）

1901年ごろ、静内町（現在の新ひだか町）に生まれ育つ。1993年没。戸籍名はステ、自称をステノとする。10代から叔父らとともに農業に従事し、第二次大戦後は農地を得て経営を中心となって支え、地域社会でも積極的に活動した。1970年代以降は、アイヌ語、アイヌ

の神事、口承文芸、生活文化などについて積極的に後進を指導し研究者に協力した。アイヌ民族博物館においても様々な伝統的技術、特に女性に関わる知識を継承し、イオマンテ（熊の霊送り）などの伝統儀礼などで指導的役割を担い、聞き取り調査にも積極的に協力するなど音声資料を数多く残した。同様に静内町教育委員会の業務にも従事・協力し、『静内地方の伝承—織田ステノの口承文芸』全5巻が刊行された。1984（昭和59）年には北海道文化財保護功労賞を受賞するなどその功績が広く認められている。

川上まつ子氏（1912–1988）

1912（大正1）年9月20日、現在の沙流郡平取町荷負のペナコリで生まれる。1988年没。祖母であるウワルスッから受け継いだアイヌ語の能力は、同世代の女性の中でも卓越したものとされ、日常会話のみならずカムイユカラ（神々の物語）やウウェベケレ（人間の物語）などのアイヌ口承文芸にも精通していた。また、伝統的な生活文化についても造詣が深かった。

1983年からはアイヌ民族博物館に常勤し、様々な伝統的技術を次世代へ伝授した。特に聞き取り調査に積極的に協力し、146本もの音声資料を残した。1999年には「アイヌ民族博物館伝承記録4 川上まつ子の伝承植物編1」、2002年には「アイヌ民族博物館伝承記録6 川上まつ子の伝承植物編2」が刊行されている。

上田トシ氏（1912–2005）

1912（大正1）年10月3日、現在の沙流郡平取町荷負のペナコリに生まれる。12歳年上の姉木村キミさん、幼なじみの川上まつ子さんなど、後に伝承者として知られる人々に囲まれて育ったが、父親がアイヌ語を使うことを嫌っていたこともあり、幼いころには全くアイヌ語を話さなかったという。

その後、平取町旭（上貫気別）に入植、農業に従事していたが、75歳になる1987（昭和62）年の秋から冬にかけて、最晩年の姉木村キミさんからウウェベケレ（散文の物語）を教わる。その後、次第に伝承者として知られるようになり、博物館や研究者への協力、口演会、記録資料作成などに精力的に活躍された。

1996（平成8）年、姉に続き、北海道文化財保護功労者賞を受賞。2005年7月24日逝去。

織田ステノ氏には、中断期間もありながら3名の中では最も長きにわたる16年の間、アイヌ民族博物館の調

(4) 調査は当時の博物館学芸員（筆者を含む）と職員、また館より調査を委託された外部の研究者によって行われた。

(5) 文字使いなどを筆者が一部改変して転載。

査に協力していただいた。そして話者と公開資料が他地域に比べて比較的多いとされてきた沙流方言ではなく、いまだ不明な部分が多い静内方言の膨大な資料を語り残してくださった。沙流地方の川上まつ子氏は伝承者としては若い世代に亡くなられ、それを惜しまれた方だった。調査に協力いただいたのは4年という短い期間であった。そして沙流地方の上田トシ氏は川上氏と同年だが、伝承者としての経歴には大きな違いがある。氏は若い頃からずっとアイヌ語をほとんど話さなかったが、川上氏や姉の木村キミ氏が相次いで亡くなられる前後からアイヌ語を流暢に語り始め、伝承者として知られるようになったという稀有な経歴の方である。調査期間は8年であった。

4 問題の所在

川上まつ子氏が語った「エゾマツと魔鳥⁽⁶⁾」という散文説話がある。その話にはエゾマツとkesorapという名の架空の鳥の2神が登場する。そして物語上、エゾマツが主人公を助ける善神、kesorapが仇なす悪神という明確な役割の違いがある。ここでは両者の衣装がどのようなものであるかについて、当該箇所を抜粋する。

＜川上氏の語りによるエゾマツの神の衣装＞

wentarap=an akusu
私（主人公）が夢を見ると
kamuy kosonte utomciwre
神の上等の着物を身にまとい
kunne cipanup eepanu kane an
黒い鉢巻をしめた
kamuy menoko
神の女性が

＜川上氏の語りによるkesorapの衣装＞

wentarap=an akusu
私（主人公）が夢を見ると
kunne kosonte kunne cipanup
黒い上等の着物（を着て）、黒い鉢巻
eepanu kane an kamuy menoko
をしめている神の女性が

ここでは両神ともに黒い衣装を身につけており、表現にはっきりとした差は見いだせないということがわかる。さらにこの録音から14年後、川上氏はすでに鬼籍に

入られていたが、残された録音を聞いた上田トシ氏によりこの散文説話を再演した「エゾマツと魔鳥⁽⁷⁾」が記録されている。そこでの神の衣装は以下のように語られている。

＜上田氏の語りによるエゾマツの神の衣装＞

wentarap=an he... ne akusu
私（主人公）が夢を見ると
kunne kosonte utomciwre
黒い着物をまとい
kunne cipanup epaunu kane an
黒い鉢巻をした
kamuy menoko
神の女性が

＜上田氏の語りによるkesorapの衣装＞

wentarap=an ruwe ne akusu
私（主人公）が夢を見ると
kunne kosonte utomciwre
黒い着物をまとい
kunne cipanup epaunu kane an menoko
黒い鉢巻をした女性が

つまり善神、悪神の衣装は両伝承者とも身につけるものの全てが黒で統一されているという点で一致している。少なくとも両伝承者は、そのことに違和感を覚えて、どちらかの衣装を他色に変更するということにはなかった。

アイヌ文化の神々は、ヒグマ神や雷神がそうであるように、神の心がけ次第で、強い力を使って人間に幸いをもたらす場合と災いをもたらす場合の双方がみられる。悪行をした神でも、心を入れ替えて守り神になるということもある。善悪双方の神の衣装の色が同じであるというのはそうした理由と説明が可能であるが、その色が黒であるというのはなぜであろうか。筆者は、ここにはアイヌ文化独特の色感覚が現れているのではないかという仮説を立ててみた。

5 対象資料一覧

巻末の表を参照されたい。「資料番号」はアーカイブ上で公開されている番号と一致する。「出現形態」は、伝承中神がどのような形で人前に姿を現したかを夢、実体どちらかで記した。また神が姿を現しても、人間の姿と特に変わりが無い場合、話の展開上敢えて普通の人間

(6) アイヌ語アーカイブC0150KM_34626ABP。エゾマツと魔鳥の組み合わせについては類話がみられる。

(7) アイヌ語アーカイブC0227UT_35298ABP。

と区別のつかない姿をしている場合は対象外とした。

6 「神の衣装」表現の分類

前項の資料について、神の衣装についての表現を以下のtypeに分類した。

type1.抽象表現

「kamuy ne kus koraci an (神なのでいかにも神らしい) …」のように、神らしさのイメージを聞き手に委ねるタイプの表現。同表現で人に対する神々しさを説明したものについては対象外とし、物語中それが神の姿であることが読み取れる表現があるものに限った。

type2.色表現

「kunne kosonte utomciwre kane an (黒い上等な着物を身にまとった) …」のように、具体的な色を伴う表現。ただし色を伴って現れた場合にも、それが何かの「物」を模していると判断される場合にはtype4とした。

type3.色+抽象、抽象+色表現

「kunne kosonte utomciwre kane an kamuy ne kus koraci an (黒い上等な着物を身にまとった、神なのでいかにも神らしい) …」のように、色と抽象の双方が見られる表現。色+抽象表現、抽象+色表現、と順番が入れ替わることは普通にみられる。

type4.その他

「雷文様」「ヘビ文様」などの具象表現を含め、type1～3に当てはまらないものは全てここに含めた。また織田氏のみに見られる「山すそのクマおやじ」の人間形態「やせて顔色の悪くみすばらしい中年男」はtype4+とした。

7 考察

type別の割合をグラフにしたものが以下の図1～3である。

図1の織田ステノ氏では、何らかの色表現が伴う

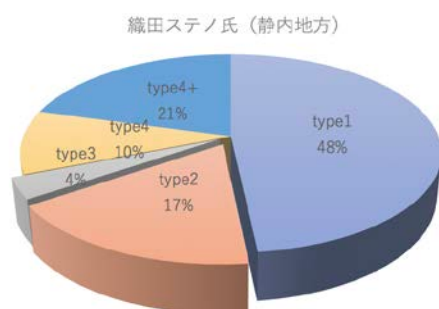


図1

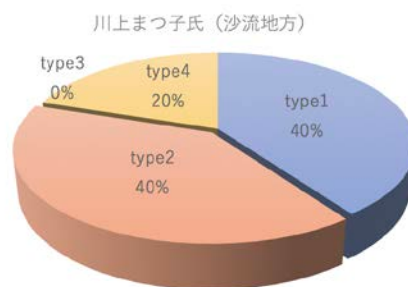


図2

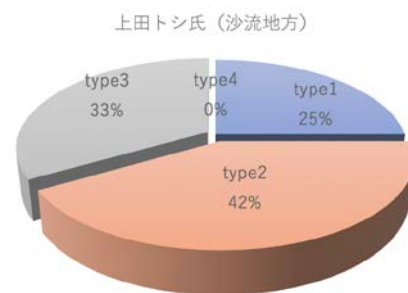


図3

type2、type3の合計は21%であった。type1の「抽象表現」48%、type4の「その他」31%に比べると、色表現の割合は最も数値が低いという結果が得られた。これは筆者の、神の衣装は色とりどりという当初の予想を外れ、神の姿を表現するときには必ずしもそうした表現が伴うものではないという結果になった。type1「抽象表現」が最も多かったが、type4には「やせて顔色の悪くみすばらしい中年男」の他にも「ヘビ模様」など比較的自由度が高く具体的なイメージで語られているものも見受けられた。織田氏は3氏の中では最も多くの資料が採録されているという点でも貴重な結果が得られた。

図2の川上まつ子氏では、type3「折衷表現」は見られず、type2「色表現」の割合が40%であった。type1「抽象表現」も40%、type4「その他」が20%で、type1とtype2の割合が同じという結果になった。織田氏と川上氏の調査期間は重なる部分があるので、表現の世代差というよりは個人差と考えた方がいいように思われた。type4については、「雷文様の家」「稲光が先に出てきて、その後現れる雷神の女性」など具体的な表現が見られた。

図3の上田トシ氏は、何らかの色表現が伴うtype2、type3の合計は75%で、3氏の中では最も数値が大きかった。type1「抽象表現」が25%、type4「その他」は0%で、いずれかの「型」に必ず当てはまっている語り、そして自由な表現の割合は少なくなっているという印象を受けた。「3」で述べた通り、上田氏は織田氏、川上氏とは調査期間が異なる。上田氏の生年は川上氏と同じであるが、川上氏が1970年代から様々な研究者の訪問を受けていたのに対し、上田氏が語り手として人前に出

るようになったのは1980年代の終わりである⁽⁸⁾。このような伝承者としての経歴の違いがグラフに顕著に現れているのではないかと考えられた。

色の比較表

	黒	白	赤
韓田ステノ氏	4	1	2
川上まつ子氏	3	1	1
上田トシ氏	5	4	

図4

図4は、色表現の中に見られる色の種類を抽出して比較したものである。母数そのものが少ない中ではあるが、本稿で分析した散文説話においては、神の衣装表現で最も神に結びつく色は3氏ともに黒であり、それが2つの「エゾマツと魔鳥」で見られたような、力の強い神が善悪に関わらず黒の衣装を身につけているという表現に結びついていると考えられた。

8 おわりに

本稿では「神の姿」の表現方法について、アイヌ語アーカイブ上の3名の日高地方伝承者について分析を行った。

雷神が稲光模様の衣装をまとうなどのように、神の正体をイメージするような衣装表現は、結果的に本稿で取り上げた3名では4例しかなく、率直にいうとかなり少ないという結果になった。そして「神なのでいかにも神らしい…」のような抽象表現や単色表現のほうが多く用いられていたが、色表現自体が神の姿に必ず伴うものではなく、伝承者によってはむしろ少数派ですらある場合が認められるというのは、本稿をまとめる中で改めて気づいた傾向であった。冒頭で述べたように、川上まつ子氏が「しづく文様」「カッコウ文様」などの具体的表現があると説明していたのは、散文説話ではそうした表現が多用されているということではなく、稀にそうした印象的な表現が見られるということを説明したのだと解釈することができる。そして同じ日高地方とはいえ、静内

地方と沙流地方という異なる地域の話者の間でも、表現がほぼ同じtypeに整理できたというのは、今回の分類作業で得られた成果であった。これらが今回の対象資料のみの傾向であるのか、もっと広く認められる傾向であるのかについては、今後慎重に分析を進めていかなければならないし、口承文芸でも他のジャンルについては別に精査していくべき問題であるというのは言うまでもない。

本稿は、アイヌ文化における生物神のシンボルカラーについて考えるための序論であり、口承文芸にみられる「神と色の関わり」について、筆者が知り得た情報を整理するというのがそもそもの主旨であった。今後に控えるさらに大きな問題については、個別に稿を改めた上で丁寧に考察していきたいと考えている。しかし本稿をまとめた中で、資料的に多くはない中でもなぜ最も黒という色が神に結びついているのかという疑問がどうしても残った。現状までのところで敢えて推測すると、アイヌ文化では生物神の中でも最高位にあると言っていいヒグマ神の色イメージが黒であり、そのことと無関係ではないと筆者は考えている。アイヌ文化では、口承文芸に登場するキツネの中で最も位が高いとされるのが黒ギツネ神⁽⁹⁾であること然り、少なくともアイヌ文化で「黒」は死⁽¹⁰⁾や魔、悪に結びつくようなことはなく、高貴なものに結びつく神の力の強さを示す色であると、現時点では考えておきたい。

本稿で取り上げた3氏と同じ年代の伝承者の中には、神の姿について語らないスタイルを持つ方もいる。年代差も個人差も考慮すべき問題ではあるにせよ、本稿の3氏は、神の姿について明確なイメージを持っているという共通点があった。口承文芸は変わりゆく宿命を持っており、どの話者の語りが本来のものなのかという類の価値観に結びつけることは筆者の意図するところではない。それぞれのスタイルにはその人、その年代にしかない事情が存在するはずである。何よりもこうした貴重な資料を語り残してくださった3氏に、改めて敬意を表したい。

本稿は、2019年9月15日に札幌学院大学言語学談話会第100回で概要説明した内容に基づいている。札幌学院大学の奥田統己氏には、これまでもアーカイブ事業全体を通して貴重なご教示を賜ってきたが、事業はまだ発展途上にあり、今後の進展に合わせてご指導も長く継続されていくことを願うものである。そして本稿をまとめるにあたって、北海道博物館の小川正人氏に執筆を勧めていただいた。またモニター諸氏に多大な助言を賜った。

(8) 札幌学院大学奥田統己氏によるご教示。

(9) アイヌ文化の黒ギツネ神と白ギツネ神の諸問題については、第44回日本口承文芸学会大会で研究発表の予定。

(10) 死後の世界が描かれた散文説話に「あの世」に関する特定の色イメージは管見の限りないが、「黒ではなく赤い漆器を副葬品として埋葬したために死者の魂が戻ってきて、それを察知した犬が夜に吠えて村人たちが眠れなくなった。他村の人が死者の国に行って死者と面談した結果として、副葬品を掘り起こして解決した」という散文説話（梗概、川上まつ子アイヌ語アーカイブ資料34673B）が存在することからも、死者と色の関わりについてはまた大きな未検討の問題として存在するのは明らかである。

最後に、京都大学の河原達也氏と研究室の方々により、アイヌ語アーカイブの飛躍的な作業効率化が実現しつつあることに、記して感謝申し上げたい。

引用参考文献・データ

- アイヌ民族博物館 1997. 伝承記録3 上田トシのウエペケレ.
アイヌ民族博物館 2015. 上田トシの民話 1-3.
アイヌ民族博物館 2015. アイヌと自然デジタル図鑑(web).
アイヌ民族博物館 2017～. アイヌ語アーカイブ(web).
AA研アイヌ語資料公開プロジェクト 2016～. 東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所(web).
荻原真子 2016. 動物カムイたちの「許されぬ恋」—神謡再考.
ユーラシア言語文化論集 18. 千葉大学ユーラシア言語文化
論講座.
奥田統己 2017. アイヌ口頭文芸研究の課題. 日本口承文芸学会
編. こえとことばの現在—口承文芸の歩みと展望. 三弥井
書店.
北原次郎太 2018. アイヌの動物変身譚における「第3の変身」に
ついて. 口承文芸研究 41. 日本口承文芸学会.
静内町教育委員会 1991-1995. 静内地方の伝承 I-V 織田ステ
ノの口承文芸 1-5. 静内町文化財調査報告書.
中川裕 1997. アイヌの物語世界. 平凡社ライブラリー190. 平
凡社.
中村禎里 2006(1984). 日本人の動物観. 星雲社ビニング・ネッ
ト・プレス.
中村とも子 2010. 日本の異類婚姻譚における人と動物のあい
だの距離—「変身」の視点から. 口承文芸研究 33. 日本口承
文芸学会.
安田千夏 2018. 北海道アイヌ口承文芸「人助け樹木神」につい
て. 口承文芸研究 41. 日本口承文芸学会.
安田益穂 2018. アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブについ
て. 口承文芸研究 41. 日本口承文芸学会.
安田益穂 2019. アイヌ民族博物館におけるアイヌ語アーカイ
ブについて. 全国歴史民俗系博物館協議会令和元年度年次
集会(第8回)研究集会「歴史・文化の継承」報告(配布資料).

表

(注) 調査年月日などのデータは、2018年3月までの整理作業に伴う調査で判明したものをそのまま記す。今後の追加調査で修正の可能性あり。

織田ステノ氏（静内）

	資料番号	タイトル	採録年月日	登場神（日本語名）	出現形態
1	C0071OS_34188A	石狩の勇気のある末娘が語った話	1977年4月2日	nupuri kes un wen ekasi (山すその悪いクマじいさん)	夢
2	C0072OS_34189AB	姉に虐待され犬になった娘がオコジョ 神に助けられる	1977年5月2日	upascironnup (オコジョ)	実体
3	C0011OS_34100AB	犬の神様からの授かり物	1979年5月29日	horkew kamuy matnepoho (オオカミ神の娘)	夢
4	C0012OS_34103B_34104A	蛇神に化かされたクマ神	1979年6月4日	kinasut kamuy (蛇神)	実体
5	C0002OS_30006AB	目つきの悪い犬	1980年2月22日	nupuri kes un wen ekasi (山すその悪いクマじいさん) →reyep kamuy (犬神)	夢
6	C00008OS_30010B/34195A	切羽が取り持った縁	1980年2月23日	不明	夢
7	C0016OS_34120A	女の腹にサケが飛び込んだ	1980年2月23日	不明	夢
8	C0018OS_34120AB	家の神から呼ばれた女	1980年2月23日	cisekorkamuy (家の守り神の木幣)	実体、夢
9	C0021OS_34126A	シナ皮を背負ったクマ	1980年5月28日	nupuri kes un caca (山すそのクマおやじ)	夢
10	C0024OS_34127B/34128A	祭壇の神に育てられた子供の敵討ち	1980年5月29日	nusakorhuci (祭壇の老女神)	実体
11	C0030OS_34139B/34140A	人が行方不明になる村を救ったイクレ スイエ	1981年7月29日	nupuri kes un caca (山すそのクマおやじ)	夢
12	C0034OS_34144B/34157A	パナウンベとハルニレの木	1981年8月10日	cikisani kamuy (ハルニレの神)	実体
13	C0035OS_34145A/34157A	悪い姉に殺されそうになったが神に助 けられた娘	1981年8月10日	sokorkamuy (滝の神)	実体
14	C0036OS_34146A	シナ皮を背負ったクマ	1981年8月21日	nupuri kes un acapo (山すそのクマおやじ)	夢
15	C0043OS_34151AB	イヌエンジュの神に助けられた娘の話	1981年8月26日	cikupeni kamuy okkay (イヌエンジュの神の男)	夢
16	C0043OS_34151AB	イヌエンジュの神に助けられた娘の話	1981年8月26日	hure tokkoni (赤マムシ)	実体
17	C0044OS_34152AB	神の山の大カジカ	1981年9月13日	不明	夢
18	C0057OS_34164AB	イベツの上流の村長の息子と醜女の縁 談	1982年7月29日	不明	夢
19	C0058OS_34166A	人が行方不明になる村を救ったイクレ スイエ	1982年8月9日	nupuri kes un poro ekasi (山すその大きなクマじいさん)	実体
20	C0049OS_34158A	アイヌにタモギタケを授けた蛇神	1982年9月13日	takne tokkoni (短いマムシ)	実体
21	C0102OS_34435A	ニコロマメを授けた女神	1982年10月10日	不明	夢
22	C0107OS_34447A	ある村の話（公開検討中）	1982年11月23日	kannakamuy (天の神)	夢
23	C0062OS_34171AB/34172A	姉に虐待され犬になった娘がオコジョ 神に助けられる	1988年2月2日	upascironnop kamuy (オコジョの神)	実体
24	C0062OS_34171AB/34172A	姉に虐待され犬になった娘がオコジョ 神に助けられる	1988年2月2日	不明	実体
25	C0064OS_34174AB/34175A	村長の息子と貧乏人の娘	1988年2月4日	kannakamuy (天の神)	夢

26	C0065OS_34176AB/34177AB	悪い姉に殺されそうになったが滝の神に助けられた娘	1988年2月5日	sokorkamuy (滝の神)	実体
27	C0068OS_34180AB	イヌエンジュの神に助けられた娘	1988年2月8日	hure tokkoni (赤マムシ)	実体
28	C0068OS_34180AB	イヌエンジュの神に助けられた娘	1988年2月8日	cikupeni tonon (イヌエンジュの男神)	夢

川上まつ子氏 (沙流)

	資料番号	タイトル	採録年月日	登場神 (日本語名)	出現形態
1	C0147KM_34609AB	雷神にさらわれた娘	1985年5月31日	kannakamuy (雷神)	実体
2	C0148KM_34620A	大津波を予知して村を救ったキツネ神	1985年10月14日	不明	夢
3	C0149KM_34621A	カシワ原で育てられた神の落とし子	1985年10月16日	rankekantokorkamuy (下天の神)	夢
4	C0150KM_34626AB	エゾマツと魔鳥	1985年11月20日	sunkutonomat (エゾマツ神の妻)	夢
5	C0150KM_34626AB	エゾマツと魔鳥	1985年11月20日	kesorap (魔鳥)	夢
6	C0156KM_34677AB	供養をしてくれる人を探す墓標	1986年11月9日	irurakuwa (墓標)	実体
7	C0159KM_34683AB	ワシ神の化身と人間の娘	1986年11月29日	sukup okkaypo (成長した若者)	実体
8	C0178KM_34720AB	ユベッの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟	1987年5月24日	ayoroの神?	夢
9	C0163KM_34695AB	イクレスイエとミズナラの神	1987年10月24日	ketupetono (ハリガネムシ神)	実体
10	C0163KM_34695AB	イクレスイエとミズナラの神	1987年10月24日	pero katkemat (ミズナラの女神)	実体

上田トシ氏 (沙流)

	資料番号	タイトル	採録年月日	登場神 (日本語名)	出現形態
1	C0198UT_35225B	さまよう舟の女神	1994年10月2日	cip katkemat (舟の女神)	実体
2	C0203UT_35228A	フクロウを養ったイクレスイエ	1995年10月26日	kamuycikap (フクロウ神)	夢
3	C0205UT_35229A	シャチの耳輪	1995年11月10日	不明 (repunkamuy?)	夢
4	C0206UT_35230AB	白い犬の水くみ	1996年3月25日	horkewkamuy (オオカミ神)	夢
5	C0207UT_35231A	カツラの舟とハリギリの舟のけんか	1996年3月25日	ranko (カツラ神)	夢
6	C0209UT_35232A	ウサギの穂摘み	1996年9月28日	isepo (ウサギ神)	実体
7	C0211UT_35234B	ヘビ神のツノ	1996年9月28日	kinasutkamuy (ヘビ神)	夢
8	C0214UT_35236B	息子に「ゼンマイ」と名づけた夫婦の話	1997年8月27日	payokakamuy (伝染病の神)	夢
9	C0233UT_35299B	石狩を守るクモ神の夢を見たパロアツテの話	1999年6月15日	yaoskepkamuy (クモ神)	夢
10	C0226UT_35298A	木彫りのオオカミ	1999年9月29日	kimunkamuy (クマ神)	夢
11	C0227UT_35298AB	エゾマツと魔鳥	1999年9月29日	sunkutonomat (エゾマツの女神)	夢
12	C0227UT_35298AB	エゾマツと魔鳥	1999年9月29日	kesorap (魔鳥)	夢

Description of Garments of Deities Portrayed in Narrative Prose of Ainu Oral Literary Art: Analysis of Materials from the Digital Archive of the Ainu Language

YASUDA Chika

In the view of the world established by narrative prose within Ainu oral literary art, deities frequently take human form and appear before humans, both in dreams and reality. It is conventionally explained that the various deities wear garments that reflect their true nature when appearing before humans: "Water deity = garments with droplet motif", "Black fox deity = black garments of superior quality", "Cuckoo deity = cuckoo motif", and so forth. However, observing materials

made available to the public via the Digital Archive of the Ainu Language, we learn that the oration of appearances of deities differs from this, utilizing abstract expressions, specific color representations, and the like. This paper hypothesizes that, of these, the use of the color black is linked to color representation that is peculiar to Ainu culture, and, by classifying descriptions of deities into four types, tests the hypothesis with specific examples.